

轆轤(ろくろ)と土塊(つちくれ)

めぐみ教会

2026年8月2日

開会賛美 聖歌 522 「地の塵に等しかり」

開会祈禱

聖書朗読 イザヤ書 64 章 8 節

主よ。あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。
私たちはみな、あなたの手で造られたものです。

説教 ろくろと土塊

序 おはようございます。初対面の方もおられますので自己紹介をします。1990年から、29年間この教会で牧師をしていました。清野と申します。2019年に主任牧師を辞して、つくばに移り、晴耕雨読の生活をしております。正確に言うと晴でも酷暑でなければ庭いじり、雨の日はテレビで大リーグ観戦ですかな。生活は余らず不足せず、まさにぴったりの生活を悠々と過ごしています。本当に感謝なことです、お祈りありがとうございます。

とは言っても、奇数月の第2日曜日はつくばの教会でメッセージをしていますし、頼まれれば、ちょっと遠いところでも出かけています。そして出かけると、その地域にいるかつてのめぐみ教会の仲間たちとめぐみネットワークなる同窓会でも、旧交を温めています。お世話になった友人や仲間には「終活御礼旅行」、迷惑をかけた方方には「終活謝罪旅行」と呼んでいます。

東京基督教大学の大学院の授業も数回担当しています。そして信仰クラスとキラキラ会では皆勤賞メンバーです。ですから無為無策で全く怠けているわけでもありません。教育と教養は保っています。(つまり今日行く所と、今日やる用事)があります。

そればかりか、牧師を辞めたら、逆にいろいろな課題に直面し、集中して研究できることを喜んでいます。例えば日本のキリスト教式葬儀文化やキリスト教の死生観について学んで、外部で何回か講演をしてきました。クリスチャンの信仰の成長にも新しく関心が湧き、信仰クラスの教材を改良したりしています。

そして当然のことながら、自分自身の一生の総括を始めました。そこで素晴らしい本「ラビ・ベン・エズラ」に出会いました。著者 Robert Browning は約200年も前の英国最大の詩人でした。書名の「ラビ・ベン・エズラ」という人物は、ブラウニングよりもさらに500年以上前のユダヤ人思想家で、その思想を紹介したものです。

非常に難解な英詩で有名なのですが、手島郁郎師の素晴らしい翻訳をみつけました。そこから紹介します。

この詩は7行の句が32連続く長編で、神を信じて生きることがどんなに素晴らしいかを、高らかに歌ったものです。今朝は、その本の美しい言葉と私自身の人生を重ねた時の感動をお分かちしたいと思っています。

第1連 最初の1連です。英語がネイティブの人のために英語で紹介しましょう。

Grow old along with me!
The best is yet to be,
The last of life, for which the first was made;
Our times are in His hand
Who saith “A whole I planned.
“Youth shows but half; trust God;
See all nor be afraid!”

名訳を紹介します。

老いゆけよ、我と共に
最善はこれからだ。
人生の最後、そのために最初も作られたのだ。
我らの時は、聖手の中にあり、
神言い給う「すべてを私が計画した。
青年はただ、その半ばを示すのみ
神に委ねよ、すべてを見よ、しかして恐れるな！」

「老いゆけよ」、は何か老人に対して語り掛けているようですが、そうではなく grow です。成長せよ、大きくなれ、繁茂せよ、成熟せよ、というのです。「若者よ、我と共に大きく成長せよ、わしと一緒にどこまでも人生を歩くのだ」というのです。だからこの詩は、長い人生を生き抜いて来た信仰者の、若者への応援とアドバイスであり、かつ歩んだ道を振り返り、主なる神へ捧げる感謝の告白なのです。

我らの時は、聖手の中にあり、神言い給う「すべてを私が計画した。神に委ねよ、すべてを見よ、しかして恐れるな！」「すべては私が計画した、だから私に信頼せよ、そして決して恐れるな」このように語り掛ける神がおられる。若者よ、だから生きることを恐れるな！というのです。それならば、その神に信頼して歩む人生は、何とワクワクするものでしょう。

この84行の詩は、宝石のような言葉に満ちています。これからは、その詩の引用でなく、私が感動した多くの言葉を、きわめて勝手に切り貼りしたものです。著者にも翻訳者にも非常に失礼なことです、原詩の翻訳ではないことを、ご了承ください。

著者は、全体を通して、最初に朗読していただいた、イザヤ書の言葉を土台に作詞しています。

主よ。あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。

私たちはみな、あなたの手で造られたものです。 イザヤ64:8

第2連

ろくろを動かすのは陶工である神様であり、土塊とは私のことです。

創造主は土塊(つちくれ)を轆轤に乗せた。

神の火花が土塊に触れ、土塊を激しく震わせた。

火花は命となって燃え上がり、心臓はときめいた。

御声を聴くとは、いかに畏れ多く

生きて学ぶは、いかに楽しきかな。

神の轆轤の土塊であること、

獣ならず、人でありしことを感謝しようと。

火、炎は、旧約聖書では神の臨在と顕現、存在と現れを表します。神の火花(スパーク)は人を覚醒し人を生かす命でも在ります。

神の火花が土塊に触れ、土塊を激しく震わせた。火花は命となって燃え上がり、心臓はときめいた。獣ならず、人でありしことを感謝しようと。

こんな言葉を聞くと、思い出すのです。私もこの神の火花を頂いたなと。灰色の受験生活、今でいう受験地獄の中で悶々としていた時です。教会に誘われ、聖書の言葉に触れたのです。そうだ自分は獣ではないのだ、争って奪って、食って満腹してまどろむだけの獣じゃないのだ。自らの弱さと脆さに苛立ち、葛藤し、生きることに悩み、呻く人間なのだ。そして笑い、喜び、歌い、考える生き物なのだ。さらに目には見えなくても神といわれるお方を信じて、地上で唯一祈る動物なのだ。そうだ人でありしことを感謝しよう。こんな土塊に、神の火花が触れてくれたのだと、思うしかないのです。

ここにいるみなさんも、様々な形でこの神様の火花を受けたのですよね。数えきれない人々が、その人生で幾度か神の火花を意識し覚醒したのでしょうか。

それから、私は良く聖書を読みました。新約聖書のガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイなどは、一晩で集中して読みました。生きて学ぶは、いかに楽しきかな。聖書を読み続けると、さらに強烈な神の火花を受けたのです。ヨハネは喜んで言います。

Iヨハ 3:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

他人ために命を捨てる、何か仰々しく聞こえますが、そこに真理があるのでしょうか。「幸福論」を書いたヒルティーは、こう言います。

一般人の耳にはいかに奇妙に聞こえようとも、幸福は、享樂することではなく、奉仕することにあるのだ。

何かを得る喜びではなく、何かを提供する喜びこそ、真の幸せなのだ、ということです。そういえば、主イエス様はこう断言しました。

マタイ 16 章 25 節 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。

人生を自己中心から、神中心に見ることが秘訣なのです。神様を喜び、神の喜びのために、自らの命をささげる、これこそ人生の究極の目的であり、最高の幸福なのだ。こんな覚醒、目が覚めるような火花を受けたように思い出すのです。

第3連

それから、確かに私の中で、火花は命となって内に燃えました。牧師と成り、宣教師になってインドネシアにも行きました。どこにいても主なる神様は、不思議なことを行ってくださいました。私という素材は上等でなく、弱く脆いものでしたが、過去56年間、神様は驚くべき忍耐をもって、轆轤を回し続けてくれました。

自分の一生を振り返ると、そこに湧いてくるのは、ただただ神様への感謝です。

轆轤は廻り、土塊は形を成した。

ただひたすらに為した善き業、

時には降りかかった人間の称賛、

文字に残さなかったひそかな苦しみ、

無視されたまま闇夜に埋めた熱い思い、

誤解されたまま忘却された崇高な想い、

望めども成り得なかったすべて、

このすべてが、神の手中にある私、

神の轆轤が形作った貴重な盃。

このような言葉を聞き、自分の人生を振り返れば、確かに、あれも在った、これも在ったな一、と思い起こすのではないのでしょうか。

私も著者と同じように、自分を見て正直に告白するのです。わが人生に満ちていた醜さや自分可愛さ、でも確かに在った純粋な愛。逆に降りかかった悪意や誤解。そして望めども成りえなかったすべてが、私の真実なのだ。だから、ろくろの上の盃は、立派ではない、ゴージャスでもない、並みの器かもしれない。イヤ、歪みある傷ある脆い器に過ぎないのだ。まったく聖なる神様の前では、そんな自分を正直に認めざるを得ないのです。

ただそれでもなお、主なる神様は、お前は私が形造ったユニークで貴重な器だと言ってください。何という優しさ、何という安心だろうか。

第4連

そんな風に、自らの人生を総括している私は、信仰の歩みを共にした仲間たちと、

一緒に、そう皆さんと一緒に、静かな喜びをもって、告白したいのです。

轆轤は廻り、土塊は言う、
わたしは老年に達した
今ここに私の人生の損益を吟味しよう。
火焰はすべてを灰にすれど、なおそこに黄金を残す。
その目方を量って、この人生を誉めもし、咎めましょう。
老いて後、全能者の真意を知る
かつては全き力に震え、今や全き愛に憩う。

この一連の言葉は、以下の聖句を土台にしています。

Ⅰコリ 3:13 その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。

我々一人一人の人生の真価が試される日があるということです。何と恐ろしい、そして何と厳粛な言葉でしょう。神の炎がわが内の偽りと我欲、誇りとおごり、すべての虚構を焼き尽くすのです。そこに残るは、完全に燃え尽きた灰だけに違いありません。

しかし著者は、「なおそこに黄金を残す」、と言います。それは著者の願いでしょうか。著者の希望でしょうか。いいえ、それは著者の信仰の確信なのでしょう。それはまさに神の憐れみ、神の恵みなのです。それならば、私も、勇気をもって、自らの一生を咎めもするが、褒めてもやりたい。

そして著者は告白します。

「老いて後、全能者の真意を知る、かつては全き力に震え、今や全き愛に憩う。」

何よりも、この土くれを形作った、主なる神様の真意を知るのです。それは神の善意、慈しみ、優しさです。だから老いて後、神の力を賛美し、神の愛に憩うことが出来るのです。今はただひたすら感謝をささげるのみなのです。

祈祷 土塊を貴重な器に形作られる神様、すべての若者たちに、あなた様の火花を与え、命で満ちし、貴重な一生を備えてください。私たちのすべてを記録される神様、私のすべてをご存じの上で、なおもお前は貴重だと言ってくださるあなた様に、心から感謝します。私たちは、あなた様の力をほめたたえ、あなた様のやさしさに憩いを得ています。心から感謝申し上げます。アーメン

私も神様に感謝しています、と言われる皆さん、想いを込めて、力いっぱい賛美しましょう。

応答賛美 教会福音讃美歌 468 「キリストの愛 我に迫れり」

祝 祷 マタイ 16 章 25 節 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。 主イエスの恵み、父なる神の慈しみ、政令成る

神の親しい交わりが、会衆一人一人の上に豊かに限りなくありますように。